

# JTA通信 第6回

生活と結びついた芸術感覚とは

発行日：2025年7月1日

## はじめに

こんにちは、高本です。

今回は、「芸術とは何か」という話を考えていきたいと思います。

といってもそのままダイレクトにやるには壮大過ぎて手に負えないので、シクロフスキーの『手法としての芸術』という論文を中心に、芸術が日常の時間の流れにどう食い込んでくるものなのか、そしてその何がいいのか、自分たちの生活と何の関係があるのか、この辺りぐらいまで降ろしてきつつ進んでいこうという目論見です。

例によって、最近書いた記事の振り返りからでございます。

## 最近の記事の振り返り

6/23 [社会的な成功・優越感と自分の軸・価値観について【人生の軸Q&A⑩】](#)

6/24 「『人生の当事者意識』について何か意見を貰いたいです。」【人生の軸Q&A⑪】

これで今回の質問シリーズはいったん終了しました。また全体で共有して考えていきたいことがあれば、まとめていきますので、質問などはどうぞお気軽に。

6/26 [外部の影響で内側に新たな感覚が生まれるのではなく、それと共鳴したことで元から持っていたことに気づくというイメージ](#)

昔のメモを雑に眺めていて少し思ったことを書きました。で、さらにこれについてまたちょっと思ったことがあります。

書いて数日のうちは自分の生活過ぎてなんかちょっと生々しい感じがして距離をあげたくなるが、しばらくして完全に他人化してみたとき、そこには何というかわざとらしさがなくて、必死でそれっぽいことを言おうとしてる感じがなくて、そういうところに面白さがある。

この面白さというのは、多分こっちの中で感情の流れというか考えが始まることなんですね、それが促される、直接に役立つとか何かうまくできるようになるとかではなく、今度はこういう風に見よう取り組んでみよう、こんな風に人と関わってみよう、こんな文章を書いてみよう、これについてもっと掘り下げてみようとか、何でもいいんですが、そういう「主体的に何かしたい」という、まさに「○○したい感じ」を促してくれるのです。

よくある「○○してる人、後悔します」みたいな激浅の心理学的知識で恐怖心を煽ってくるのではなく、つまり、不安から行動させられるのではなく、主体的に前向きに次の一步を、それは大きかろうが小さかろうが、今日何か一つやってみようと思えるそんな気持ちを促してくれる感じがある。

それがこういう日記というか小説というかエッセイというかよく分からない何かとして書かれたものの面白さ。こっちに行動を促そうとしていないからこそその隙間にこっちから入っていくような読み方が自然となされる、そういう面白さなのではないか。どうでしょう。

#### 7/1 [何かを掘り下げた豊かさはその本人の表現によって証明されたいという話](#)

これも前回の小林秀雄の話の一番最後で、ゴッホの音楽について「精神の自由の獲得は表現によって証明される必要がある」という流れがあるんですが、それについてもう少し広げて考えてみよう～というやつです。

というわけで、本題～。

## 時間軸に落とし込まず全体として把握する

保坂和志の『小説の誕生』という本の最初の方に、次のような記述がある。

「小説を理解したいと思うなら、自分も含めた身近な人間を時間軸に落とし込んで把握していないのと同じように、丸ごと記憶しようとするしかない、という風に私は小説について考えている」

僕は小説についてそれほど考えてきていないのであまりわからないが、全体を理解するとか捉えようとするときの比喻として、「自分や周りの人間を時間軸に落とし込んで把握していないように」という言い方は抜群に分かりやすい。いや、わかりやすいというか、そういう体感でイメージすればよかったのかという感じ。

小説や映画やドラマなどの出来事は、僕たちが受け取るときには一本の時間の線に乗っかっているが、この流れと各点でのイベントを「順番通りに摂取していくことがその作品を受け取るということではない」という話だと思う。

例えば、友人と毎週会うとして、一か月間で四回、自分の目の前で何かしらの振る舞いをしたとして、その四つを一つの時間のラインに並べても、それで彼のことが分かりはしない。それはあくまでもある期間僕たちの前に現れた出来事でしかなく、

というか、ある人間がいて、彼との出会いが、「僕たちの中での彼という小説」の始まりであるとした場合、まずその時点で彼がそれまで生きてきた数十年の時間がある、そしてそこそこの頻度で交流が始まるとして、そこでの彼の振る舞いや考えを矢印の付いた直線の上に置いて行くと、出会いから現時点での「こちら側が捉えられる情報」はそこにあらわれる。

ただそれで、その人格が分かるわけではない、性格や特徴の一つや二つは分かるかもしれないが、それで彼がどんな人間であるかを説明することはできない。そこにある情報だけで一部を説明はできるかもしれないが、「だからこの人はこういう人間です」ということにはならない、

でも僕たちは彼のことをよくわかっていて、彼がいつもどんなことを考えていて、どんな風に過ごしていて、何が好きで嫌いでどんな時に何をしがちなのか、そしてもちろんこんな問いへの回答には引っかけられないものも含めて、彼の立体的な人格が各々の内部で輪郭を持っている。

つまり、言葉では説明できないような塊があって、それが本体で、もちろんどんな人って聞かれればその一部をこそぎ取って出力は出来るが、その本丸を一言で説明できるわけがなく、むしろそれを表現するために必要な言葉をすべて並べたときに「彼という小説」ができるのだろう。

僕たちの目の前には直接現れてこない、言語からはすり抜けた奥の方にまでたどり着き、つかみどころのないそれにアクセスするために、「丸ごと記憶しようとする」ということ。

これについて、高校物理で必須の「単振動」を思い出した。

## 単振動の例

物理の問題で単振動というのがあり、これは位置や速度などの値の時間変化が三角関数で表される振動を指すが、そこでよく出てくる図として、ボールが上下に行ったり来たりするものがある。

床と天井があって、その真ん中からボールは動き始め、天井に届きそうになるにつれて速度は減衰し、天井の壁にタッチすると次は向きを変えて床の方に向かっていき、真ん中で最も速くなる。さらに床に近づくほどボールは遅くなっていき、床に着くとまた真ん中に向かっていく。これを繰り返すのだが、このとき、ボールの位置と速度と加速度が問題になる。

まずボールの位置は上が正として軸を取ると天井に触れるときに位置の最大で、床に触れるときに最小となる。これは見ればすぐに分かることだが、速度についてはもう少しややこしく、ただ、これも少し考えてみればわかることで、上下の壁についてまた逆方向に進んでいくということは、天井と床にある時にはボールの速度は0になっている。一方で真ん中を通過するときは、例えば天井から床に向かって速度を上げていき、また床に着くところで0になるのだから、真ん中を通過するときに最大となる。

ややこしいのは加速度で、これは速度の変化を示すパラメータである。速度の変化の度合いがどの位置でどれくらいあるかを考える。すると、真ん中を通過して天井に向かう時、真ん中で最大の速度だったボールは天井近くで減衰していくのだから、真ん中を通過する瞬間から必死で下向きに引っ張る必要があるわけですね、車で言えば、ブレーキをかけ始める必要がある、そうでないと天井を突き抜けてしまう、ぶつかってしまう、というわけで、真ん中から天井に向かうにつれてボールの進行方向と逆向きに加速度は大きくなっていきます。

で、考える順序が逆になったが、この運動は、一定の速さで円をぐるぐる回るボールに横から光を当てたときの影の動きに一致する。この円でのボールの運動を考えると、その陰である、直線を行ったり来たりするボールの運動を想像すると分かりやすいという説明が参考書には書いてたりするのだが、つまり、小説や人間を時間軸に並んだイベントで把握しないということは、この円運動全体を見ようとするのと同じ。逆にそれらを時間軸に落とし込

んで捉えようとするのは、この等速の円運動を、その影だけで判断しようとしてるということ。

で、この時間軸に落とし込まず全体を捉えるという感覚は、小説や人間だけでなく、世界と触れる時の姿勢としてめっちゃ面白いと思ったのです。

というよりも、時間軸だけで見ていたところから、時間軸に落とし込む見方と落とし込まない見方がある、というように1だったものが2であることに気づく、この鏡面が傷つき粗くなっていくような、摩擦係数をあげて引っ掛かりが増えるような目というかフィルターにしていく、そしてこのざらざらの目を持って外に出て、より多くのものを引っ掛けていく、そんな過ごし方が面白いのではないかと考えている。

## まだ見ぬ化石の眠る地層を作るように

そしてこれはシクロフスキーの言う「異化」というもので、今回はここについて見ていきたい。この日常の解像度が上がっていく感覚が面白いんですね。

というのは、この異化自体もそういう話ですが、もう一つ外側から見たときに、異化やその周辺の話を見ていく中で、日常の物事の見方が細かくなっていく感じ、つまりそこにある機微とか情味とかおかしさとか、面白さとかそういう喪に気づけるようにしていくことが楽しいってことですよ。

そのフィルターというかスカウターは人によって違うわけですが、それが自分の道を進んでいくということで、何回か前に自分の学問とか自分の方法とか言ったりしていましたが、そういう自分だけが感じる面白さ、これは別にその特別感がいいということではなく、他の人はそんなに思っていないけど、自分はその感じが面白い・好き、というその方向に進んでいくことって嬉しいわけですよ、気分がいい。辛くない。

そしてそうやってると、普通にしてるだけで常に経験値が入ってくことになる。ただ生きてるだけで勝手に何かに気づいて感じて考えが起こりアイデアが出てきて、次は何しようどうしようといつでもいつでもいっぱい抱えることになる。

これらは基本的に一人の時間に行われるが、そこで外部との接触が始まれば、ほかの人にはないパラメータがとんでもない形で振り切ってる状態なので、楽々と人の頼みやお願いに応えられたり手伝えたり助けになれたりする。

それこそ「情報発信が～」と言ってるのもそういう文脈で、今進んでるその過程やもっと遡ったところからの時間の流れは、それに近い方向に進んでいきたい人にとっては安い言い方をすればノウハウの塊であって、別にノウハウじゃなくてもその人の思考や行動の痕跡はすべてお宝です。

別に体系としてまとまってなくてもただ記録があるだけで、考古学者ばりに、必死で地層を掘り起こしてなんかすごい化石が出てこないかって調べたくなるわけですね。で、その始まりは、日常の解像度を上げていくということになる。目の前のそれからより多くの情報が入ってくる状態にしておく、それが感覚を磨くとか感性を磨くとかそういうものだと思えます。

## 「芸術」の観点から解像度を上げていく

例えば、ドラッグをやると聴覚とかが敏感になって、適当な曲を聞いた時にその奥の楽器がすごくクリアに聞こえて、ギターならピックが弦をこする音まで聞こえてきたりするようですが、そういうのって、単純に言えば「その対象から摂取する情報量が多い」ってことですよ。一流の音楽家にはこういうのが普段から聞こえてるんだと思うんですね。つまり、僕がなんとなく「この歌ええな〜」って聞いているそれから感じ取る情報量が桁違い。

その感性があるからいい曲を作れたりするんでしょうが、それよりもまずはそんだけ聞き取れたら気持ちがいいってのがありますよね、シンプルに。生み出すのももちろんそうですが、普段僕たちが聞き流すような音楽から面白さや楽しさや美しさを感じ取れるわけで、それって同じ時間を過ごしても時間の密度とか満足度のようなものが変わってきます。絶対楽しいはずなのです。

で、人それぞれ「そういう感じ取れ方ができればめっちゃ楽しい」という領域があるはず、僕の物の見方はここまで見てきたような話そのもの、そんな方面が多いですが、武道をしている人なら武道をしている人なりの面白い世界との接し方があって、そこに敏感になってより多くの情報を受け取れるようにしていく、それがその人の文脈で感覚を磨くということです。

そのために物事を掘り下げていく過程が、「開拓」というもので、その学びや実践を記録または外に出していくことで道が「整備」され、エネルギーの循環がスムーズになり、それによってまたもや今日が面白くなっていく。

となったときに、その根本の物の見方に影響を及ぼしそうなものはすべて大切に捉えておきたくて、つまり、今回の「異化」や「芸術」というのはそこにもろに関係してくるのです。というかそういう設定のもと見ていくのが面白い。というわけで、シクロフスキーの『手法としての芸術』という論文と、そこでのキー概念となる「異化」について。

## 芸術という方法

***So that life—life only exists then, when it is lit by consciousness.***

**「だから、人生は、意識によって照らされたときにのみ存在するのだ。」**

(トルストイ、1897年2月29日)

今回はフィルターについて考えていこうと思っていて、それはただの言葉遊びではなくこれが現実とどうつながっていてそれによって今日をどう変化させていくことができるのか。ものの見方、フィルター、世界と接する角度、芸術や表現について考えてみたい。

芸術というのは、よく分からないじゃないですか。何となく大事な感じがしたり、教養としての文脈で言われることもあるし、でも何なのかよく分からない、なんか大事な気がして、それが自分の中にあることで豊かになるという話はたくさんあるがいまいちどう向き合っているか分からない、美術館とか作品の展覧会とか昔適当にいろいろ動いてみようとしていた時に行ったこともあります。もちろんすごいんですが、だからと言ってこれでどうすればいいのかと。

ちょっと話それますが、絵画って美術の教科書の小さいイラストでしか見たことなかったんですが、数年前にフェルメール展に行って実物を見たときにやっぱり全然違ってました、まずでかい。多分2メートル以上あって、見た瞬間に物理としての圧というか迫力がある。

これは大学の教授が趣味で参加してる合唱団のコンクールに行ったときにも感じたんですが、クオリティ云々とかよりも物理の威力。音圧だけすごいい、というかこうなるとすごさというのは結構な割合を物理的なことが占めているような気がしないでもない、本に仕立て、古典的名著のようなものは装丁とか分厚さから違っていたりする。その迫力ですごそう感が最初にある。

で、話を戻して絵画で言えば、生で見ると油絵具のざらつき具合とか、何回も重ね塗りしたそのもっさり感とかそういう質感、これも物理ですが、オーラというものがあるんだとしたらそこに宿るのだろう。

でも、そういう体験があってもなお、美術とか芸術というものは分からないわけです。別に絵を描いてきたわけでも壁に絵画が並ぶ家で育ったわけでもなんでもない。「芸術」というもののゲシュタルトが一切ないのです。

そのフェルメールの例えば、聖書や世界史的な背景が分かってる方が楽しめるのかも観ましたが、たぶんそういうのもちょっと違って、確かに知識があると見えてない部分も含めて面白がれるというのはあるんだと思いますが、たぶん本質はそこじゃなくて、なんというかそれは一つの作品レベルの楽しみ方で、もう何階層か上に「芸術とは何か」というものがあるはずで、こっちに近づこうとした方がいい、いいというのは生活に落とし込みやすい。

## 習慣で自動でやってるのは何もしてないのと同じ

そこで、シクロフスキーの『手法としての芸術』という論文がありまして、ここから文学理論が始まったとか言われるような、かなり根本のところにあるものです。

この論文のキーワードとしては「異化」ってことになる。と言っても分かりにくいんですが、英語で言えばdefamiliarizationで、馴染みある状態の解除というニュアンス。とにかくこの「familiar」がスーパー大事な概念。

長々とやっても仕方がないので、一言で言えば「芸術とは、知覚を遅らせること」ということになる。つまり、作品それ自体の話もちろんあるとは思いますが、それも全部一つにくくったときに、芸術の目的とはこれだと。

この知覚に関してもう少し見ていくと、まず人間というのは、習慣で行うことはどんどん無意識の領域に押し込んでいくのだと。これはよくスコトーマと言ったりするように、人は見るようで何も見てなかったり、直近で興味のあることしか認識できなかったりするというよくある話です。

そうすると、例えば、朝起きてトイレ行って歯磨きしてコーヒー飲んでシャワー浴びて学校や会社に行く時、おそらくほとんどの人は自動でやってるわけですね。いちいちそこに次は

あれしてこれしてということは考えない、朝バタバタしてる時にそんなところにエネルギーを使ってられない。習慣の力というのはビジネス書なんかでも擦られ倒してるように偉大なわけです。それによっていちいち考えずに気づいたら終わってるようなことも起こってくる。

で、朝の準備に関してはもちろんめっちゃありがたいんですが、今言ったように自動化なわけなので、いつの間にか終わってるわけですね。じゃあ朝はそれでよかったとして、授業や仕事してる時もこれも習慣であれば、気づいたら終わってます、最初大学生になり立てとか仕事覚えるタイミングでは全部を意識の上で一個ずつ動きを確認していきますが、だんだん慣れて来れば特に何も考えずにできるようになり、気づけば終る状態。そして、家に帰ってきた後は、適当にご飯食べて風呂入ってゆっくりして寝るとします、これもなれたら自動化です。

ってなると、もう一日がほとんど自動で終わる。この論文でもトルストイの日記が引用されていて、「今掃除しててんけどその記憶が全然なくてももう終わってた、これは何もしてないのと同じ、人生もこんな感じで過ごしてたら、それは何もしてないのと同じ」って言うてるんですね。

つまり、習慣や無意識はありがたいようできて、全部がそれだと全時間が自動で流れていくだけになってしまう。これを「familiar」って言うてるわけですね。「馴染みある状態」だと。

## 芸術とは自動で流れていく知覚に摩擦を生み出すもの

そこで芸術が出てきます。つまり、芸術というのは、ただ出来事が流れていく通り過ぎていくそこに引っ掛かりを生じさせるもの。

例として、トルストイの技法が挙げられていて、彼は安易によく使われる名前を使わないことで、familiar を strange に見せるのだと言います。「鞭打ち」ではなく「法を破ったものを裸にし、床に投げつけ、鞭で尻を叩く」と表現する、これによって、「なんで体を針で刺したり手足を万力で絞めたりせずに、ただケツを叩くというアホみたいなやりかたやねん」って言いたいというわけです。

本質ではなく形、つまり表現を変えることによって unfamiliar を生み出す。あなたは誰ですか、という問いに、安易に「物理専攻の大学院生です」と答えるのではなくて、「弦理論のテキスト読んだりあいみょんの曲弾いたりブログ書いたりしてる人です」と答えるようなもので、これは自分という対象の知覚の仕方を変えるというか、「その対象を長く見よう」という姿勢。

文章についても言及されていて、散文というのは、情報伝達が目的なんだとすれば、それはすらすら読めることに価値があります。いちいち婉曲的な表現に引っ掛かってる暇はない。サーっと読んでちゃんと内容をわかりたい。

一方で、詩になると、それはむしろすらすら読めないからいい。知覚を遅らせる。ゆっくり長くそこにとどまらせる。つまり「The language of, poetry is, then, a difficult, roughened,

impeded language. (詩の言語は、難解で、荒々しく、妨げられた言語なのです)」ということになる。

で、「じゃあなんでそれがええねん」というそもそもの疑問が僕は浮かんだわけですが、ここが面白くて、「長く見ることでそれ自体に意味がある」って言うてるんですね。なぜなら「そうやって長くゆっくり知覚することでそこにある芸術性を味わうことができる」から。それが芸術作品だってことです。だから defamiliarization です。これが異化です。

日常で、馴染みがありすぎて何の違和感もなく通り抜けていくところに、馴染みないものを作ることで、そこに引っ掛かり立ち止まりゆっくり長く知覚することを促す、それが芸術なのだ。

「芸術は、人が人生の感覚を取り戻すために存在する」って書いてます。芸術は方法ってことなんです。そこにある静的な何かというよりも、こっちの近くのプロセスに影響を与えてくる揺さぶってくる、そういう存在、それによってその背後にある感覚に意識が向く。よく知っているようにその形で受け取るのではなくて「知覚されるまま」ということになる。

*The purpose of art is to impart the sensation of things as they are perceived and not as they are known. The technique of art is to make objects "unfamiliar," to make forms difficult, to increase the difficulty and length of perception because the process of perception is an aesthetic end in itself and must be prolonged. Art is a way of experiencing the artfulness of an object: the object is not important...*

「芸術の目的は、物事を、知られているようにではなく、知覚されるままにその感覚を与えることである。芸術の技法は対象を "unfamiliar" (馴染みないもの) にし、難しいものにし、知覚の難しさと長さを増大させることである。なぜなら知覚のプロセスはそれ自体が美的な目的であり、引き伸ばされるべきものだから。芸術とは、対象の芸術性を体験する方法であり、対象は重要ではない。」

## 人生という芸術作品の制作者であるとするならば

例えば最後の方にパルテノン神殿の話が出てきます。芸術というのは秩序があるわけですが、その秩序は普段使う意味の秩序とは違います。パルテノン神殿を見て人は美しいと感じますが、これは無機質で均一な意味で秩序だっているわけではありません。柱の一本一本を見てみれば長さが違っていたり傾いていたりしていびつになっている。でもそれもひっくり返していい、美しい。

だからこれも「ゆらぎ」の話になりますが、秩序だけというのは面白くない、魅力的じゃない。生活に置き換えてみてもそうで、決まりきったルーティーンという秩序だけの毎日だと当然面白くありません。でも人間の機能として「馴染みあるものを認識しない」ということは避けられません。

これについて苦米地英人氏はゴールを設定することで、スコトーマを外す、というアプローチを提案してます。もちろんそれも大いに効果的で、人生の軸とか言ってるのは基本的にはこの考え方から外れてはいません。ただ今回ここまで見てきたときに、もう一つあることになる。人生を芸術と見立てるというもの。



僕たちが人生という芸術作品の制作者であるならば、詩人が詩的言語によって読み手の知覚を遅らせ感覚を取り戻させるように、この人生を過ごすまた別の僕たちの「familiar 的通過」を妨害する「defamiliarization の仕掛け」をちりばめることができる。

ただまっすぐ進むだけではなく、蛇行やゆらぎがあるからいいのであって、この「いい」というのも秩序あるリズムからはみ出た部分があるからこそ、日常の中でそのポイントに焦点が当たる。

それはつまり雑に通り過ぎないということで、規則的なものだけでは習慣となり無意識の方に押し込められて自動化が起こり全部がいつの間にか終わっていて「はい、また明日」ということになる。

日常の外、枠の外、ランダム性の感覚でそこをすり抜ける、人生という芸術作品に能動的に関与していくことで周りの景色が簡単に familiar にならないようにしていく。それは秩序あるルーティンからの逸脱であり、曲線的にブリコラージュ的に生きることであり、この両者のバランスが生活における 1f ゆらぎとなって、この自然や宇宙のリズムと調和した、地球に生きる生物としての心地よい過ごし方に漸近する。

## コロンビア先住民の建築物の異化性

この前たまたま、コロンビアのムイスカ族を訪れたときに書いたブログ記事を見ることがありました。彼らの伝統的な住居を見せてもらったのですが、そこではすべての動作に意味付けがなされていて、その宗教や民族の世界観からくる形で、一つずつの動きに制約がありました。

それによって、普段は何も考えずに適当に自動で動いているわけですが、一瞬立ち止まり、その動きと同時にもっと抽象度の高いところにある世界観が思い出されて、どんな物語に生きているのか再度自覚するきっかけになるだろうと思った、という話でした。

該当箇所をブログの方から引用してみると、

「ここには、おそらく男性器の象徴みたいなことで中心にぶっとい木の幹的なのがありまして、その木を中心に反時計回りだったんですが、それが太陽で自分が地球だから公転的な意味で反時計回りなんですよね。」

当然出る時も反時計回りなんですが、こんだけ徹底させられると多少思うこともありまして。

反時計回りに出ていくとかは、一つ一つの動作振る舞いにちゃんと意味があるわけで、それは逆にいうと動きに対して意味づけをちゃんとするからこそ、全てを丁寧というか適当に動かないことになるわけですね。」

この感覚はすごい大事な気がしましたね。普段はやっぱりどうしてもそれまでの習慣で自動で適当に動いてることが多い。

でもこうやって中心が太陽で、自分は地球だから入る時も出る時も反時計回りで〜って思うとその行動を丁寧にやっていくようになるわけですね。」

普段の振る舞いは主観で自動でやってしまうが、そこにその民族の世界観からくる意味付けがなされることで、一つ一つの動作に改めて注意が向く、これはまさにシクロフスキーの言う異化ですよ。そう思って見てみれば、この家というか建造物も芸術作品と言えるのかもしれない。

ここに入っていくのは反時計回りで、と決まっているわけですが、これは男性器の象徴である、中心におかれた柱、これを太陽として、自分たちはそこを回る地球と対応させているわけです。だから入るときも出るときも反時計回りでないといけない。

これによって、僕は「普段適当に動いてることも元をたどれば、その民族や宗教の世界観やモノの捉え方にまで通じているのかもしれない」と思ったのです。

つまり、日常の適当な動作にも宗教的な意味付けがあるのかもしれない、と立ち止まり、ゆっくりとした知覚が始まりました。異化です、異化。この芸術作品であるムイスカの建造物があったからこそ、反時計回りをしないといけなくなり、それによってその他の日常の動作と、その地域コミュニティや民族の世界観との対応に注意を向けさせられてしまったのです！！

おそらく、これがシクロフスキーの言う芸術なのです。そもそも、反時計回りに入らざるを得ないというその仕掛けの時点で、背後にあるムイスカの世界観や物語に意識が向いています。となると、この建物はムイスカ族にとっては自分たちの信仰に意識を向ける作用があり、僕たちにとっても日常の動作を振り返る作用があり、改めて立派な芸術と言えるでしょう。

## 宮沢賢治の「農民芸術」へ

また、こうして考えていく時、これは宮沢賢治の言う「農民芸術」を体現することになります。

『農民芸術概論綱要』という、「農民芸術の本質」「農民芸術の技術」などいくつかの小さな塊が集まった、数回スクロールするだけで全部読めるぐらいの詩のような小論の中で、宮沢賢治は「農民芸術というのは、生活の中にあるものだ」と展開している。

直接言ってるわけではないが、「今は宗教や芸術がなくただ労働だけ、ただ生存だけがある状態で、だから自分たちの芸術を作っていかないといけない」という話に始まり、労働という行為や行動も、彼が「準志」と言う「意図・目的・意思」のようなものと掛け合わせることで、演劇や舞踊という芸術になっていく。

「芸術家であれ」ではなくそんな感性感覚認知で生きようという主張として、「誰人も芸術家たる感受をなせ」と言う。農民芸術精神的には、「準志によって生活や労働すらも芸術になってくるのだから、ただ労働のみただ生存のみだと『たのしないやん』」ということ。

これも労働を労働としてただ通過していくのではなく、そこに一つ引っ掛かりを生み出すために「農民芸術感覚」というものを提示したとみることができる。こうなるとこれはシクロフスキーが『手法としての芸術』で扱っている芸術に近い。

さらに、人生に異化を持ち込む方法論として「表現する」ということがあるように思う。これによって、日常の一コマや誰かとのやり取りのすべてが「もう一步掘り下げる対象」となり素通りすることなく時間の密度が上がっていく。

「人生における異化の実践としての農民芸術」という言い方ができるのかもしれない。この農民芸術についてはまた次回以降！

## おわりに

今回は『手法としての芸術』を中心に、ものの見方という観点から芸術について考えてみました。そしてこの精神を体現していく時の哲学として「農民芸術」が有力な気がしています。

もっと言えば、これに近いものとして哲学者の鶴見俊輔は「限界芸術」という、「芸術と生活の境界にあたる作品」を提唱しており、ここでも宮沢賢治が取り上げられています。

つまり、この辺がこれまためっちゃ面白そう！ってことです。おそらく、次回はこの続きになっていくと思われます。

というわけで、何か気づいたことや言いたいことや意味不明なことなどあれば、今回の内容に限らず連絡してくださいませ。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございました！